

富岡町と川内村で

うごく人 関わる人

東日本大震災活動記録



富岡町と川内村でうごく人・関わる人

(東日本大震災 活動記録集)

東北大学の学生ボランティア団体「福興youth」が、
富岡町と川内村の住民、支援者、移住者の方々に、
東日本大震災の発災直後のお話や、避難先から帰還後の
暮らしについてなど、お話を伺ってきました。
さまざまな目線から富岡町と川内村の復興の歩みをお伝えします。

CONTENTS

02 東北大学 福興youth紹介

03-11 富岡町と川内村でうごく人・関わる人のインタビュー

03 富岡町 住民 松本 政喜さん

05 富岡町 住民 西原 千賀子さん

07 富岡町 移住者・支援者 鈴木 みなみさん

09 川内村 住民 志賀 風夏さん

11 川内村 住民 井出 茂さん

13 学生インタビュー 東北大学 山崎 英彦さん



東北大学 福興youth とは？

福興youthは東北大学の学生ボランティア団体です。
主な活動地域は福島県浜通りのいわき市や双葉郡です。
それらの地域で以下の活動を行っています。



1 公営住宅での住民さん同士のつながりづくりの後押しや、ひとりひとりの言葉や言葉にならない声に心を傾けること



2 住民さん主体の地域の伝統行事やイベントのお手伝いを通し、地域を元気にしていくこと



3 福島に足を運び続け、住民さんの想いや姿、取り組み、地域の実情に触れ、見つけた福島のこれまで、そして“いま”を多方面に発信していくこと



これらの活動を、所属メンバーによる活動に加え、
東北大学生や他大学生から募集するツアーや、東北大学で開講されている授業と連携して行っています。
多くの学生に福島を訪れる機会をつくと同時に、
住民さんの「また会いたい、福島を知ってほしい」という気持ちに応え続けています。

この度のNPO法人コースター主催の

「大学生やボランティアによる川内村・富岡町を中心とした双葉郡の帰還者への継続的な生活支援
および帰還後の新たな絆・コミュニティづくり創出事業」でも、
こちらの冊子の取材はじめ多くの活動に参加させていただきました。



Twitter
@fukko_youth



Facebook
@vol.tohoku.fukkoyouth

公式サイト

<https://fukko-youth.tumblr.com/>



PROFILE
松本 政喜さん

富岡町生まれ富岡町育ち。73歳
双葉郡の広域消防署で35年間勤務。
平成20年3月31日に定年退職。
退職後、小浜区民からの推薦を受け、
小浜区行政長に就任

TOMIOKA



気になる事を聞いてみました！

Q 今後のまちづくりにむけて若い人たちへの継承はどのように考えていますか？

A 政策としては、ハードよりソフトに力を入れています。復旧に努めている若い人や原発関係で富岡に勤めている人に「富岡って住んでもいいな」と思ってもらえるように、震災前、富岡の人口が増えたのは工業団地などに勤めている人が定住したからです。避難した人の代わりに、ふるさとの1つとして富岡に移住してくれる人を増やしたいですね。小浜区にも小中学生が7人住んでいます。その人たちとの話し合いも必要です。

Q 三春の熊耳で自治会を立ちあげた経緯は？

A 周りの人の様子を見て、生活の水準を向上させたいと思ったのがきっかけです。自治会を立ち上げないと、町とも行政とも対峙できません。周りの声を待つだけではできなかったこと。知り合いにも声をかけて立ち上げました。16,000人も避難しているから、公助を待っているわけにはいかない。まず自助と共助でできることをやる。そうすれば公助も動きやすい、と考えました。



当時と今の事、教えてもらいました。

自分たちの姿や富岡町の環境を見て「富岡町に戻ってきてもいいかな」と思ってもらいたい。

発災直後・避難・仮設での生活

当初、避難所に指定されていたのは小浜区にある体育館でした。しかし、耐震性が低く寒かったため、2つの公共施設に分散して避難。翌朝、川内村への避難指示が発令。バスは出せなかったため、各自自家用車で避難しました。そのため中心となる道路はあっという間に渋滞。3月12日、田村市の体育館に到着（以後2週間ほど避難）。25日から大玉村のフォレストパークへの避難を經由し、7月15日に三春町熊耳地区の仮設に入居しました。高齢者率がものすごく高く、「自助」のために自治会をつくりました。自治会立ち上げ当初は、ボランティアを受け入れるノウハウや経験がなかったため、社会福祉協議会と連携をとっていました。その後、高齢者の引きこもりを防ぐために、敬老会をはじめます。12月には、多くの個人・団体の協力を得てイルミネーションを実施。さらに、三春町の子どもたちも招いたクリスマス会も行いました。しかし、イルミネーションは飾って3日もすると見にくくなる人は激減。地域の人も「避難している人がいるところに行ってもいいの？」という気づかいから、見に来てくださる方は少なかったです。それを受け、翌年は三春町社協庁舎にイルミネーションをつけました。それからは多くの人が見に来てくれるようになりましたね。2014年には、田植え、稲刈り、脱穀、餅つきを子どもたちに体験してもらうイベントを開催。翌年は、田んぼは使用できませんでしたが、畑を借りて子どもたちに野菜づくりを体験してもらい、夏祭りですの野菜を地域の方々に配りました。並行して、盆踊りや学習支援も2012～2016年の5年間続けました。

帰還後

2017年7月に帰還。行政長は継続しました。避難先と富岡町は違います。帰還した人は自立していて、支援ではなく、自助と共助で繋がりを持っていないといけません。2017年、避難区域解除当初は15世帯ほど帰ってきました。2017年最初の小浜区総会参加者は38名。町の変化を伝えました。富岡町は住みやすい町です。水害もない。スポーツセンターも整備され、子どもたちの歓声は震災前に近づいています。まだ居住している人は少ないものの、流動人口は震災前に近い。外から来た団体への宿泊補助も行っています。戻ってきてとは言えない。自分たちの姿や環境を見ながら「戻ってきてもいいかな」と思ってもらいたいです。先月も小浜区に1世帯戻ってきました。これからもっとにぎやかになることを期待しています。



松本さんインタビューの様子



Q いまに至るまでに富岡町民が乗り越えたハードルがいくつもあると思いますが、一番大きかったと思うものは？

A 放射線に対する知識をどのように理解してもらったか。風評を考える前に、放射線について考えることが重要でした。若い人には研修の機会がありますが、高齢者にとって放射線でイメージするのは広島や長崎の原爆が強く、新しく理解する機会がありません。富岡町に戻ってきてから聞かれるのも「寂しくないか」、「怖くねえか」、「放射能大丈夫か」の3つ。7軒しかなかったこの通りに今はたくさん家がある。少しずつ理解してもらおう伝えていくしかないですね。子どもを避難先の学校に入れた若い世代も、商工会にも後継ぎがいません。これはこれから乗り越えていくハードルです。

Q 残してほしい部分はどこ？

A 避難について。原発事故の避難は特別かもしれませんが、台風による避難も起きている今、非常時にどのように助け合うか、必要なことを残してほしいです。第一番には自助。「こういう災害があったらここに避難しようね」があれば地域がはばらになりません。あとは共助。町長が丁寧に避難を呼びかけて犠牲者を誰も出さなかった町もあります。今回の事故を学びとして、避難する時に円滑に動けるようにしたいです。

PROFILE

西原 千賀子さん

石巻出身。平成元年から震災直後までの23年間富岡町に住んでいた。当時は浪江町の介護施設の介護福祉士として働く。避難後、介護の仕事からは離れ、2018年より公営住宅に入居。今は当時のことを語り人として伝えている。



TOMIOKA



気になる事を聞いてみました！

Q 西原さんが避難をしなければいけないとなった時、どのような想いでしたか？

A お年寄りを残して先に避難したことに後ろめたい気持ちはとてもありました。でも、残したことで体調を崩した方や亡くなる方がいなかったことがせめてもの救いです。あの日、職業人として全うはできなかった。3/11の朝お預かりした方をご家族にお返ししていません。かといって、自分のことをまず守らなければ相手のことも守れません。職業に忠実であるべきか、自分を優先すべきか、今でもわからないんです。でも、当時利用していた方から、「私元気だからね」と連絡をいただいて、少し救われた気持ちになりました。

Q 富岡にもういちど住みたいと思いますか？

A 住んでいた家はもう壊しているし、仕事もないんですよ。住んでもいいかなと思うけど、あえて住みたいとは思えないのが、正直な気持ちです。



当時と今の事、教えてもらいました。

日常を取り戻すためには、自分の生活は自分たちでまかなうべきだと避難生活の経験の中で気づきました。

発災直後・避難・仮設での生活

発災時は浪江町の介護施設でデイケアを担当していました。利用者は120人ほどで、入所している方のほとんどが体の不自由な方や寝たきりの方、認知症の方です。3月12日の5時ごろから次第に避難指示が発令され、施設からの避難を開始。利用者・職員だけではなく、車いすや介護用品なども一緒に移動しなければなりません。職員全員で協力して、全員の避難が完了したのは20時。しかし、その後も避難指示範囲が広がり、4日間で3か所の避難場所を転々としてきました。我々職員に寝る暇はなく、ほとんど飲まず食わずの生活でした。その後、避難先でまた屋内退避指示があり、施設長(医師)の決定で我々職員が避難することに。しかし、寝たきりや認知症など、介護なしでは生活できない人を置いて避難はできません。施設長が「利用者は私が責任をもって守る」と言って、他に数人の職員が残りました。わたしは15日の昼に浪江町に心を残して南相馬を離れることに。避難を決めたものの、出身の石巻には連絡が全くつきません。そのため、息子の妻の実家がある埼玉県吉川市まで車で移動することに。吉川市役所で相談すると「避難先の家に入るときは、今まで着ていた衣服は全部脱いで、袋の中にひとまとめにして」という指示を受けました。石巻に連絡がつき、23日に石巻の実家に帰りました。その後、石巻市立漢小学校避難所で、介護、体操教室、炊き出しのボランティアを10月5日までしました。泉玉露仮設に入居してからは、仲間を募り、集会所でのカフェの開催、慰霊祭、おもちつき、ものづくりの活動を行いました。「避難しているから誰かのお世話になり続けていい」ということはありません。日常を取り戻すためには、自分の生活は自分たちでまかなうべきだとこの経験の中で気づかされました。

帰還後

2018年の1月から公営住宅に入居。双葉郡からいわき市へは28,000人が避難しました。避難した当初は、道が渋滞したり病院が混雑したり、大変でした。学校も急に人数が増えて、プレハブ教室が増設されたようです。地価も上昇しました。わたしたちが避難して町の様子が変わったのですから、元からいわきに住んでいる人は不満もたまりません。避難者が賠償金で立派な家に住んでいるとみられています。そこで、いわきの方たちに私たちを知っていただくために、仮設住宅のお茶会に来ていただいたり、交流する機会をつくったりしました。今感じるのは、公営住宅は、ご近所付き合いが難しいです。地域の人たちとの交流は難しいですが、なんとか距離が縮まるようにしたいです。



西原さん家族・サークルメンバーとの記念撮影



西原さんインタビューの様子

Q 東京電力について見方は変わりましたか？

A 見る姿勢は変わったと思います。語り人の時にいつも話すのですが、「東京電力を今更恨んでも仕方ない。今私たちがやることは、東京電力を私たちがちゃんと見て、ちゃんと安全に仕事をして、いつの日かここで安心して暮らせるようにしてくださいよ、って想いで見る。もし、世界のどこかで同じ事故が起きた時にはモデルになるように、とは思いつつも、こんな事故は私たちがたくさん、東京電力と一緒に、地域の人たち、そこに携わる人たちが頑張ってこの事故を収束させてほしい」というのが正直な想いです。また安心して暮らせるように、私たちはずっと見ていかなければなりません。

Q 自分たちで自分たちのことをやるという発想をもつのは難しいことだったと思うのですが、そのきっかけや力になった経験は何ですか？

A 震災前、富岡では自分で育てた作物を食べて分けあって生活するのが当たり前でした。震災後、避難所で支給されるもので暮らすようになってから「富岡ではこうしてものをもらう生活はしなかったよね」と言う人がいたのがきっかけになりました。力を何も持たずに逃げたのだから、最初は仕方ないです。でも時間が経てば、自分の力で生きる方法を考えることが、当たり前の生き方・考え方だと気づかされました。



PROFILE

鈴木 みなみさん

山形県出身、富岡町在住。
学生時代から福島の復興ボランティアに携わり、後に富岡町に移住した。
現在も一般社団法人とみおかプラスで町の復興に尽力している。

TOMIOKA



気になる事を聞いてみました！

Q 福島に移住しようと思ったきっかけはなんですか？

A 福島に暮らすと決めたのは、福島の人たちの考え方に惹かれているという理由です。原発事故後、本当の豊かさを問われ続けているように思うんです。暮らしの中での選択もあります。そういったところに向き合い続けている方と一緒にいることが自分の財産になると思います。

Q 福島に移住して意識や考え方など変わったことはありましたか？

A 2016年には娘を出産しました。私にとって非常に大きな出来事で、これまでは支援者として関わってきたけど、これからは一生活者として暮らしていく、この土地で自分の子どもを育てていくという意識を持ちました。よそ者としてこの地域に関わることに限界や辛さを感じていましたが、娘が生まれたことでそういったものを払拭できました。



Q 復興のために働く原動力はなんですか？

A 短大まで山形で育ち、震災当時は山形の短大2年生でした。地元の体育館が福島や宮城での被災者で埋まっていた。ボランティア活動に誘われて体育館の中を見たとき、混沌としている状況で、「自分が役に立っていないのでは？」という気持ちになり、怖くなって体育館を後にしました。「手伝わせてください。」の一言が言えなかったのが、泣きながらの帰り道でした。この震災後何もできなかった悔しさが今の原動力になっています。



当時と今の事、教えてもらいました。

生活者として、この地域での暮らしを楽しくしていくための実践を積み重ねていきたい。

発災直後・学生ボランティアでの関わり

発災当時は大学生でした。進学先である立命館大学の災害復興支援室という復興ボランティアを派遣する部署に所属して、2011年6月頃から東北に通い始めました。主に岩手県の宮古市や宮城県に通っていて、がれき撤去や仮設住宅でのコミュニティ支援形成支援を行っていました。スキルや知識のない学生の自分たちに何ができるのか悩みながらの活動でしたが、そこに住んでいる人たちが段々好きになっていきました。支援を続けていく中で福島のことも知りたいという気持ちが増してきましたが、当時は放射能がどのような影響を及ぼすのかまだ判断がつかない状況が続いていました。大学で

も、福島に学生を派遣することに関しては前向きではありませんでした。私自身、怖さや無知がありましたが、福島のことを知ろうとしない自分が許せませんでした。2013年2月に私と、同じ思いを持った学生2人とでボランティアサークルを結成し、初めて福島を訪れました。いわき市に避難している双葉郡の仮設住宅での足湯ボランティアに参加し、その当時は避難している住民と地元住民の間で、情報や交流の不足から、お互いの関係がうまくいっていないという話を見聞しました。そのような状況をもっときちんと理解したいと思い、2013年9月に大学を1年間休学していわき市に移住しました。

休学後の福島での活動

休学中はNPOで働き、双葉郡から避難している方々とサロンや一時帰宅時の片付けの手伝い等を通して交流しました。「未来会議」という対話の場づくりに参加したのも大きな出来事でした。未来会議は、震災と原発事故によって生まれてしまった、意見や立場の違いを対話によって分かち合い、理解しあう場です。最初は移住者である自分の思いをなかなか伝えられずにいましたが、関わりを続けていく中で、参加している地域の人たちに惹かれていきました。こういった経験から、復学してもまた福島で暮らしたいという思いがありました。双葉郡の人から「また一緒に活動しないか」という声をいただき、卒業後の2015年夏に、再びいわき市に移住しました。福島に戻ってからは「双葉郡未来会議」という活動に参加し、住民による復興・地域づくりの後方支援に取り組みました。

現在の暮らし

現在は富岡に移住し、とみおかプラスというまちづくり会社で、交流人口の拡大に向けた新規事業の企画立案などに取り組んでいます。とみおかプラス以外に、子育て支援として、お母さんと子どもたちが安心して遊べる場を考えるママサロンや、情報誌の作成に取り組んでいます。実際に子育てや生活をしているなかで足りないものはたくさんあると感じます。医療機関が足りないであるとか、子どもの遊び場が少ないであるとか。行政に必要なものを提案しながら、ないものねだりにはならないように自分たちも工夫するようにしています。この地域での暮らしを楽しくしていくための実践をしたい、生活者の視点から自分の暮らしをよくしたい、子どもの楽しい様子を見たい、周りの人たちもそうであるといいな、という想いで生活者として実践を積み重ねていきたいと思っています。



学生とコースター坂上さんの打ち合わせ風景



インタビュー後の鈴木さん



PROFILE
志賀 風夏さん

川内村出身。福島大学の美術科を4年で中退。その後、仙台の古着屋で2年働き、その後川内村にUターン。
現在は川内村立川内草野心平記念館「天山文庫」の管理人をしている。

KAWAUCHI



気になる事を聞いてみました！

Q 川内村にはもともと戻ってくる予定でしたか？

A そのつもりでした。ずっと陶芸をしていたので、その製作の拠点として川内村に戻ってきたいと考えていました。本当はそのために数年間陶芸の修行をしてから戻ってくる予定でしたが、結果として天山文庫の管理人という仕事が舞いこんできてよかったです。

Q 川内村に愛着を持ったきっかけはなんでしたか？

A 母はもともと村外の人でしたが、川内村を好きになって移住したんです。よく他の地域の友人を家に招いていました。その人たちが「川内村の環境が羨ましい」とよく言われていて、私もこの村に住んでいることが自慢でした。同級生はみんな村外に就職しましたが、出産・老後などライフステージが変わったら故郷に戻りたくなくなるかもしれません。でも、誰も知り合いのいない場所を故郷とは言いづらくはですね。私が川内村にいることで、みんなが戻ってきやすくなればいいな、と思っています。



当時と今の事、教えてもらいました。

誰も知り合いがない場所を故郷とは言いづらい。
私が川内村にいることで皆が戻ってきやすくなればいいな。

震災直後・避難・仮設での生活

震災直後、全国から川内村に様々な方がボランティアで来てくれました。それがきっかけとなって川内村を好きになって移住する人が増えていますね。自分が把握しているだけでも10人くらいいます。花屋をやりたいと言って、ボランティアの後修行に行き、戻ってきた女の子。川内村の蕎麦でワッフルを作り、クラウドファンディングでキッチンカーを買い、全国に川内村の蕎麦を届けようとしている子。元幼稚園のスペースを使ってイベントスペースを運営しているご夫婦もいます。他の被災地の若い人同士でも連携を取れるようになり、移住してきた人たちとみんなて村の人たちと関わりを持って盛り上げるようになりました。しかし、仕事で川内村に来ている人は孤立しており、その人たちが落ち着ける場所を用意するのが今後必要になってきます。

帰還後

主に私が関わっているのは2つ。1つは川内村立川内草野心平記念館の管理人です。今は始めて3年ほどになります。一時期川内村に帰ってきている時に、草野心平記念館の職員の枠が空いたんです。管理人の任期は長く、これを逃したらしばらく入れないと思い、立候補しました。今までは定年退職後に就く方が多く、私は珍しい例です。せつかく管理人を任せられたからには「古いものを大切にしつつ盛り上げなければ」と考え意見を出すようになりました。その後、川内村で若い人が古い文庫を管理している、というのが広まり様々な取材を受けるようになりました。今までそういったことはなかったの、役場の方達は困惑されていましたね。そしてもう1つ、川内コミュニティ未来プロジェクト(以下川ニティ)に所属しています。このコミュニティが発足したのも3年ほど前です。これは地域の方に誘われたのですが、今いる子どもたちに川内村の魅力を伝えたい、後世に残したいという想いに共感して入りました。このコミュニティには村外の人も多く加わっています。川ニティでは、子どもたちと一緒に餅つきやしめ縄作りをしたり、郷土について学んだりしています。川内村には就職先がないから、若い人はみんな外へ出ていってしまいます。その前に、この時代に残っている田舎はずいぞ、川内村にも魅力があるんだぞ、ってことを伝えていきます。直接体感する機会がないと、自分の住んでいる町の魅力ってわからないままになってしまいますからね。



天山文庫での志賀さんのインタビュー



Q 震災後、若い世代は減りましたか？

A 小さい子どもたちが少なくなりました。もともと、川内村は村に定着する人は1割いるかないくらいです。20代が就職できるのは工場、村役場、原発の下請けなど限られています。そのため、村に残る20代はほぼいません。自分が知る限りでは、震災に関係なくみんな外に出ていきました。大きく減ったのは親子連れの家族です。放射線が怖くて引っ越していきました。その結果、人口の変化は小さいですが、高齢者の割合は大きくあがりました。

Q 今後川内村に残していきたいものは？

A 仕事で川内村に住み始めた人も気軽に使うことのできる場所がほしいです。カフェなど休日に遊びに行く選択肢が少なく、どのお店に行っても顔見知りだらけです。仕事で川内村に来た人にとっては、これが落ち着かなくて結局家にこもってしまいます。でも、余っている家をシェアスペースとして貸し出すことで、日替わりや期間を決めて新しいお店として使う人を募って運営したいです。外に出る選択肢を増やすことで、孤立する人をなくしていきたいですね。





PROFILE
井出 茂さん

小松屋旅館店主、
(株)あぶくま川内代表取締役。
現在は川内村議会議員、商工会会長、
観光協会会長をしている。

KAWAUCHI



気になる事を聞いてみました!

Q 子育て支援は村の外の人を呼び込む目的もありますか?

A もちろんあります。そして、そうして人が増えれば川内村にもとから住んでいる人も恩恵に授かることができます。今対象にしているのはシングルマザー・シングルファザー。彼ら彼女らは覚悟をもってやっているから、川内村に住んでいただくのに何も問題ない、地元に溶け込んでもらい、終の棲家になるといいですね。このような人たちは年に二回募集していて、モニターツアーには毎回10組ほど参加しています。川内村は医療費、給食費が無料で支度金もわずかですが出しています。引越してくる人は県内ではいわき市から、県外の方も多く、横浜から来た方もいます。

Q 川内村の外から移住してきた方と、もともと住んでいた方の交流はありますか?

A 僕は普通に暮らしているという部分では、あの人は「移住者」という見方はしたくないです。「移住者」と呼ぶと、もともと住んでいた方と乖離が起きてしまう。そうではなく**当たり前**に馴染んでもらいたいです。移住者が地域になじむ手として、農家のおばちゃん方の集まる、情報交換のできる数居の低い集まれる場所があるといいですね。友達になることができたり、子供を連れて来られたりするような場所。強制ではなく自由に行ける場所が必要だと思います。村のどこに行ったらなにかあるかを伝えられる場所が必要です。運営をするには村の高齢者の人に管理や運営をお願いできたらいいですね。

当時と今の事、教えてもらいました。



「あの人に会いたい」「あの村に行きたい」
「川内村に住みたい」そう思ってもらえる村づくりを。

川内村を伝えるために

震災後、川内村に帰村した人はまだ8割程度。震災前に比べるとまだ人口は少ないです。国が移住者に向けて補助金のシステムを作るといってもありますが、地域に魅力がなければ移住者は増えません。その魅力をいかにして伝えるか考えないといけない場面にあります。豊かな自然、美味しい作物、暖かい人々、これはどこの町にもあります。そこに「地域ごとのストーリー」が加わって初めて魅力が伝わります。場所やものを思い出した時に「あの人に会いたい」まで感じてもらう。すべてのお店・人が観光案内所としての役割を持っていけば、「またあの村に行きたい」と思ってもらえます。もちろん、移住する人に対しては住みやすい町を作るということも重要です。川内村のような小さな村に人を呼び、持続可能な地域にしていくのに重要なのは教育です。川内村では、2021年4月から新たに小中一貫校が生まれます。放課後は学校の一部を解放してカフェのように使ったり外でコンサートができたりするような、学校教育と社会が合わさる形をとります。地域の人全員が成長できる場所になります。もう一つの課題が高齢者の生活です。高齢者は施設に、という流れもありますがそれを変えたいです。地域に老人が歩いているのが理想の町の姿ではないでしょうか。子どもや高齢者などハンディキャップを持った人が暮らしの中に入れる地域を作らないと、そのサポートにお金をさくことになり、発展のためにお金をかけることができません。腰掛け的に住む部分はあります。その後、自分たちの家を建てるか、川内村で長く暮らしていけるか、そのための提案をするのが昔から住んでいる我々の役目です。交通環境の改善によりアクセスも変わってくるため、これからは勝負どころだと思っています。

川内村と食

川内村が過疎化・高齢化に直面していたのは震災前からの話です。そのため、どうすれば人が来てにぎやかになるか、定住人口が増えるかを考え、様々な取り組みを行っていました。その時にキーワードとしていたのは「健康」、「地域支援」、「郷土料理」の3つ。その3つを支えるのが地域で採れる食材、川内村の食文化です。これらに関わる交流事業(きのこの勉強会、お酒造り、田植えなど)を数多く行いました。農業はこれから大きく変わっていきます。ただ採れるものが美味しいだけではいけない。食材の向こうにある川内村の暮らしまで伝えられるPRを考える必要があります。さらに、川内村を伝えるために、最終的には日本酒を作る蔵があるといいですね。お土産の品として並んでいたら手取りやすいのは日本酒やワインなどのお酒類。さらに米作りからお酒作りまで一貫してできれば村としても1年間休まず動く農業ができあがります。



井出さん・サークルメンバーとの記念撮影

Q 旅館を経営している視点から見て、震災前と震災後の変化はどのようなものがありますか?

A お客さんは減って、客層も変わりました。震災前は釣りなどの遊びのお客さんが増えてきたところでした。以前はきのこやタラの芽など、川内村ならではの山菜でもてなしていました。これが誇りでしたが、今はできないのが悔しいです。震災後、きのこや山菜を危ないと言われたことが本当に悔しかったです。お米も最初は同じ扱いでしたが、翌年から翌々年に「川内村のお米はおいしい」と言われた時は嬉しかったです。今は自信を持って川内村のお米をすすめています。

Q 特に残しておきたいこと

A 日本全国の人に考えてもらいたいことがある。川内村、檜葉町、広野町などはすでに避難指示が解除されています。しかし、今も双葉郡に廃炉となっていない原発があり、放射性廃棄物もいっぱいあります。「双葉郡を最終処分場にすればいい」と簡単に言う人も中には多くいて、僕は**ずっと我慢しています**。なくなっているふるさとなんか、1つもありません。双葉郡は絶対に取り戻す。たくさんのステップを踏みながら少しずつやっていくしかない。これを日本全国の人々の心にとどめてほしいです。

東北大学 福興youth メンバーへの インタビュー



PROFILE
山崎 英彦さん

東北大学 福興youth
経済学部4年

Q 4年間福興youthに所属し、富岡町に通い続けて感じた変化や思ったことを教えてくださいませんか？

A 私が初めて富岡を訪れたのは2016年の5月で、富岡駅の昔のホームが残っていた頃でした。景色の変化といえば、中央商店街あたりの家が一気になくなったことですかね。初めて富岡に来たときの印象は、こういった表現を嫌がる町民の方もいらっしゃいますが、“時間が止まった場所”でした。避難指示が解除されて半年くらい経ったころ、中央商店街の家が一気になくなって、自分が知っている富岡との違和感を感じたのを今でも覚えています。町民のみなさんにも変化がありました。富岡に帰りたという想いのバラつきが、避難指示前後で次第に大きくなったんです。今富岡に住んでいる方は、ずっと富岡に帰りたと思っていて、揺るがない決意があった人が多いと思います。しかし、いわき市などに生活拠点がある方や、個人では帰りたと思っていても家族のもとに身を寄せている方のような、完全に自立しているとはいえない方たちは、帰還することへの迷いがあったのではないのでしょうか。避難指示解除後、「やっぱり私はいわきに残るんだ」と思う方や、富岡の様子から自分の知っている姿から変わっていく様子を見て「私はしばらく富岡には帰れない」と悟っていく方も多かったように思います。それを見ていて、もどかしい部分や同情する部分もありました。

Q 大学の卒論の取材地として富岡町を選んだ理由を教えてくださいませんか。

A 私の卒論のテーマは、「商業の環境が被災後どのように変化したか」というものでした。原子力災害という未曾有の災害により6年間町が止まった、いったんリセットしたこの町を記録に残すことが大事じゃないか、という想いがありました。また、放射線という見えないものとの闘いは、1個1個が新しい政策で、その政策が果たして検証されているのか疑問を持っていました。もっと仕事や生活がよくなる政策があると思っています。これまで富岡に通って人に触れ続けてきて、経済的な面だけでなく人の想いをバックアップできるものを見つけるために研究をしました。

Q 富岡に帰還された方々、富岡から避難されている方々とふれあってきて、印象的なエピソードを教えてくださいませんか。

A 自分のルーツが富岡にあると気づいた方々のエピソードを2つ挙げます。1つめは、避難指示解除前に、コースターさんと一緒に、富岡町の方々と、「避難指示解除後に帰還するかしないかをどう思う風に考えればいんだらう」というワークショップを開いたことがありました。「家を解体した時に、それまで自分が嫁いだ家だったから特に思い入れもなかったけど、解体の様子を見ると涙が出たり、帰りたくなったり、家がそこにあったことの大切さを分かった。」というお話を聞きました。2つめは、ある会議での話です。富岡の津波で被災した地域は災害危険区域になり人が住めない地域になっていて、そこは震災から9年たった今、盛り土されて防災緑地になっています。「自分や自分たちの祖先がそこで暮らしてきた証をなんとか残してくれないか。」と声を上げている方がいました。あまり自分が住んできた町ではそういうことを考える機会はありませんでした。福島に通うようになってから、「あいまいな喪失」という言葉を聞くようになりました。喪失っていつになったら終わるのかな、どうやったら報われるのかな、と考えるきっかけになりました。

Q 実は2月に富岡町で活動した時に、山崎さんのことを気になって私たちのもとを訪ねた方がいらっしゃって、富岡から山崎さんのことを想っている方へのメッセージをいただけますか。

A すごくうれしいし悔しいです。これからも手紙は送り続けますが、気になったときに会いにいけない状況にはなるかもしれません。阪神淡路大震災の時に、最後の1人まで見守るといことが大事にされました。それは富岡にも通じることがあると思います。富岡の人が私のことを憶えてくれているのは、支援した側とされた側お互いを知っている、戦友みたいな関係ではないでしょうか。本当にうれしく思いますが、会えない環境になった時にブランクが空いてしまうのはもどかしいです。機会があれば積極的に会いに行きたいですね。



Q 山崎さんの富岡との関わり方はこれから変わってくると思います。その関わり方がどうであれ、富岡の方々の人生はこれからも続いていくなかで、富岡の方々に伝えたいことはありますか。

A 自分が富岡に住むとか働くとかは今考えてないですし、今後何らかの形で関わり続ける可能性もないとは言えません。でも、富岡が変わっていく時期に色んなものを預かったように思うんですよ。故郷への想いや富岡が立派な町だった頃の記憶みたいなものを預かった、伝えられた、と感じています。そういう意味で、富岡の証人としての役割を自分の周りで担えたら、と思います。福島のがどんどん忘れ去られていくなかで、福島がこういう場所なんだよっていうのをそれぞれがイメージしてもらえかけになるし、避難指示解除後の厳しい状況の富岡を応援していくことになるのかなと思っています。あとは、自分が気になるから通い続けたいし、見続けてたいし、富岡の人と話し続けたいですね。



Q 今後の福興youthへの想いは？

A 富岡町民のいる場所に行き続けてほしいです。関わる人の裾野を広げるきっかけになってほしいです。学生が来てくれてうれしいという声はどの活動先でも聞くことだと思います。どんどん町が寂しくなっていく状況で時間が経っていくと、あんまり自分のことを考えてくれることって少ないと思う人もいます。寂しい思いをする人がいなくなることはないですし、万遍なくコンスタントに会うことは難しいと思いますが、近くに来てらんだよ、同じ景色を見てらんだよっていうことを感じ取ってもらっただけでも、富岡に通うことの意味はあると思います。今まで福興youthメンバーと富岡と一緒に来てくれた学生の参加者アンケートはぜひ掘り返してほしいです。

今後の支援活動について

当団体は、2013年から川内村の郡山市にあった仮設住宅時代から村民の皆さんと活動を一緒にさせていただいておりました。帰村後でも村民の皆さんと多くの人々のつながりをつくるために、川内村の関係組織と連携して、引き続き、村内で活動しながら、川内村の人々が暮らしやすい環境づくりに寄与できればと考えています。詳しい活動は当団体のホームページまたはFacebookページで随時発信いたします。



NPO法人コースターについて

団体理念

福島県で、創造的で持続的に自己変革していくことができる地域社会の実現を目指して、社会的課題の解決に取り組む人材の育成及びその促進のための社会的基盤整備を行うことを活動の目的としています。

主な事業内容

■事業づくり支援・復興支援活動

若者が地域に入り、住民と一緒に課題解決や地域おこし、復興活動に取り組む活動のコーディネートをしています。その他、NPO法人や地域団体の設立補助や資金調達、事務局整備などの事業を展開しています。

■コミュニティスペース「福島コトひらく」の運営

築40年以上の倉庫を改修して、交流サロン、コワーキングスペース、貸会議室、貸事務所を兼ねた複合型のコミュニティスペース「福島コトひらく」を運営しており、様々なジャンルの団体の活動拠点やネットワーキングの場所として活動しています。

■各種イベント、人材育成に関する研修

市民活動に関する勉強会その他、NPO職員向けの人材講座やワークショップを実施しています。そのほか、大学生と企業をつなげるインターンシップの仲介や高校向けに地域とつながるワークショップなどを開催しています。

